

平成24年文部科学省委託事業「防災教育キャンプ」 教育庁教育総務局社会教育課

1 はじめに

東日本大震災の教訓をもとに、熊本県において想定される災害の疑似体験をとおして、災害時に適切に行動できる知識や能力を身につけ、地域の絆を深めることを目的とし、県立青少年の家を会場とした「防災教育キャンプ」を実施しました。

キャンプは県立青少年の家2会場で実施し、天草青年の家では、上天草市立今津小学校区を対象とし8月24日（金）から2泊3日、豊野少年自然の家では、宇城市立不知火中学校区を対象とし10月12日（金）から2泊3日で実施しました。参加については、児童・生徒は全日程参加を原則とし、保護者及び地域住民は部分参加も認めることとして募集を行い、天草会場では54人、豊野会場では84人の参加がありました。

2 活動のねらいと実際の活動

(1) 避難所の疑似体験を通じた避難生活の理解

- ①体育館での宿泊 ②共同生活の体験
- ③水道水の利用制限 ④夜間照明の制限

体育館で2泊する際、ダンボールを間仕切りやクッションに利用し、就寝場所を作りました。食器はペットボトルを切って作り、洗う時はくみ置きの水をしゃくしですくって利用しました。また、水洗トイレもバケツを利用して流すこととしました。



(2) 災害の疑似体験を通じた災害時の避難方法の理解

- ①起震車体験 ②煙体験

起震車では、阪神淡路大震災と同等の震度7の揺れを体験し、地震発生時は、どのように対処すればよいかを学びました。煙体験では、火災時は視界が利かなくなり、思うように避難できなくなることを体験し、煙が原因で亡くなる方が多いことも学びました。



(3) 救助等の訓練を通じた被害を最小限に抑える知識と技術の習得

- ①三角巾を使った応急処置 ②消火訓練 ③搬送訓練
- ④倒壊物からの救助訓練 ⑤消防署への通報訓練

日赤から講師を迎え、三角巾を使った止血や関節を固定する方法を学びました。

また、地元消防署の協力を得て、災害時の対応に関する体験活動を行いました。搬送訓練では、物干し竿と毛布を利用して簡易担架を作り、実際に友達を運ぶ活動を行いました。通報訓練では、消防士の方を相手に救急車や消防車を呼ぶ練習を行い、実際に体験したことで、いざという時に冷静に行動できる自信をつけることができました。



(4) 非常食による食事を通じた避難生活時の食事体験

- | | |
|----------------------|--------------------|
| ①電気、水道、ガスなし（初日夕食） | 乾パンと水 |
| ②インスタント食品等の到着（2日目朝食） | アルファ米、インスタント味噌汁、缶詰 |
| ③炊き出し器材の到着（2日目昼食） | ハイゼックス米、レトルト食品 |
| ④食材の到着（2日目夕食） | カレー、サラダ |

水を入れるだけで食べられるアルファ米や少量の水で炊飯できるハイゼックス袋を利用し、食事作りを体験しました。婦人会によるカレーの炊き出しで、やっと通常の食事をとることができ、日頃の生活のありがたさを改めて実感しました。ライフラインの復旧に伴い食事内容も変化することを学ぶとともに、救援物資が届くまでは、各家庭で非常食を用意しておく必要があることを学びました。



(5) 自然災害の体験談を通じた地元で起こった過去の災害の学習

天草会場では、1972年にあった天草大水害について、当時小学校6年生だった平田氏に講話いただきました。校庭がプールのように浸水した話を聞き、水害の恐ろしさをあらためて感じました。豊野会場では、1999年の高潮災害の体験談を鳥井氏から講話いただきました。夜中、物音で目が覚めると、高潮で家が浸水しはじめており、家族の命を守るために、頭突きで屋根を突き破り、命がけで避難した時の様子を聞くことができました。

3 成果と課題

(1) 成果

体育館で2泊3日の共同生活を行うことで、ほぼ避難所に近い疑似体験ができました。食事、水、電気が大幅に制限される中での生活を不満に感じる人も多かったが、キャンプ終了後は、「貴重な体験ができた。」「この経験がいざという時にリーダーシップを発揮して動けることにつながると思う。」「帰ったら家族で防災についてじっくり話し合い、非常用持出袋も準備したい。」といった感想が聞かれ、防災意識の高まりを感じました。



また、今回の事業は、婦人会や老人会等の協力が不可欠な事業であり、特に、婦人会の方々には、食事の準備を全面的に協力いただきました。学校、保護者、地域の連携によって成しえた事業であり、大変意義ある活動となりました。

(2) 課題

保護者や地域住民は、2泊3日の全日程に参加するのは難しく、大半が日帰り等での部分参加であり、小学校の上級生や中学生については、土曜日、日曜日も部活動等の予定があり、参加が難しい状況でした。就学前の子どもから高齢者まで一緒に活動する場合、日程の組み方に工夫が必要であると感じました。全プログラムを全員に体験させるのではなく、全員参加のプログラムと選択プログラムを組み合わせると、知識や体力に応じた効果的な活動が行えるものと思われます。